3歳児を対象とした「マコWS」・「高瀬舟WS」の再検討
～「模倣」と「自己肯定感の醸成」～

◎鈴木康二・井上翔太・八田友和・三原大史・森田真史

1.はじめに

乳幼児の「発達」においては、自身の自発的行為による様々な経験の積み重ねが大切である。今回の報告では、3歳児に対して「真弧・考古資料」「高瀬舟」などを素材として行ったワークショップ（以下「WS」と記載）の内容を振り返りつつ、子どもの月・年齢に即した「発達段階」と照らし合わせながら、「子どもの発達」を考慮した観点から、活動の内容を見直すことを目的とする。また、コロナ禍で「接触」に懐疑的な今、「本物の遺物に触る」ということの意義についても整理したい。

2.「真弧・考古資料」WS

写真①

写真③

写真②

写真④

「真弧」とはご存じの通り、考古学において、遺物の実測作業ではごく一般的に用いられる道具の一つである。このWSでは、
①実際に本物の真弧を使って容器の形を野帳に描き写す。
②コーヒーマドラーやアイスキャンディの棒のような身近な素材を使って、真弧を手作り（以下手作り真弧を「マコ」と表記）する。
以上の点を中心に、真弧とともに本物の遺物（表採資料）にじっくり丁寧に触れながら、「考古学者」そのものを体験してもらうことをねらいとする。

さて、これまでに実施した活動の記録を、改めて「子どもの発達」という観点から見直してみると、写真①・②のように「模倣」を繰り返す様子、③では防音テープの裏紙を「剥がす」行為に集中する様子、④はマコが完成した際の「達成感」が表情に表れている様子などが見受けられる。

3.「高瀬舟」WS

写真⑤

写真⑦

写真⑥

写真⑧

「高瀬舟」は江戸初期に開削された運河「高瀬川」において、物資の流通を支えた移動手段かつ運搬具である。この WSでは、
①牛乳パックなどの身近な素材を用いて、高瀬舟を作る。
②手作りした高瀬舟に、米俵や柱材を模した荷物を載せて、実際に高瀬川に浮かべ、流してみる。
以上の2点を中心に、実際に高瀬川に入って足に水を感じながら、自分の作った高瀬舟を、流したり引っ張ったりしながら高瀬川・高瀬舟を体感してもらうことをねらいとする。

その活動の様子からは、「模倣」（写真⑤・⑥）、リメイクシートの裏紙を「剥がす」行為（写真⑦・⑧）などの様子が確認できる。

4.幼児の発達段階とWS

月・年齢別にみる発達段階とワークショップにおける関連事象～言語認識と手指の操作を中心に～

月齢・年齢	言語・認識	手指の操作（目と手の協応）	関連するWSと事象
～2歳6ヵ月	・二語文。 ・積み木の構成や粘土など自分で作った物を、食べ物や乗り物など何かに見立てるようになる。 ・「大きいと小さい」「たくさんと少し」「長いと短い」「熱いと冷たい」などの様々な二次元的認識（二項対立）を獲得し、表現し始める。	①積み木を高く積んだ後に長く並べるなど、「積む→並べる」「高く→低く（積む）」といった複数の異なる操作を順に展開する	高瀬舟WSで、完成した舟に俵や木材に見立てた模型を載せたり、船の中に人に見立てた模型（紙に書いた人形など）を載せたりする。
		②粘土など変化する素材を、引っ張ったり捻ったり、指先に力を入れて形を変えたりし始める	
		③モデルをまねて縦線や横線を描くといった手の制御ができ、十字にも挑戦し始める。	マコWSでモノをみながら、紙（野帳）に線を描けるようになる。
		④Vサインをする。	作画・工作の完成時、写真撮影に際してVサイン！
		⑤シールを剥がす、紙を折って折り目をつけることをし始める。	高瀬舟WSでのリメイクシート貼り、マコWSでの防音テープ貼り、に関連して、シートやテープの裏紙をはがす。
～3歳	・「ナンデ？」を含む問いが、対比的な二次元の一方を知りたいときに多く見られる。 ・発展的な二次元の概念として、性別（男・女）、姓名（苗字と名前）、年齢（2歳の次は3歳など）を獲得する。 ・見立てから簡単なごっこ遊びへ展開し始める。	①「並べる」＋「積む」という異なる操作を組み合わせて1つのもの（トラックや家など）を構成する。	高瀬舟WSで、完成した舟に俵や木材に見立てた模型を載せたり、船の中に人に見立てた模型（紙に書いた人形など）を載せたりする。
		②縦線と横線を組み合わせた「十字」や始点と終点を組み合わせた「丸」を描くようになる	
～3歳6ヵ月	・数についての多面的理解が始まる。例えば、1つの物に1つの数字を「対応」させて数えること（3個の物に、それぞれ1つずつ「1、2、3」と対応させる）や、「1、2、3」と数を順に「呼称」すること、さらに複数の数を記憶して再生すること（数の復唱）は「2」まではでき、「3」に挑戦し始める。 ・「おなかがすいたときどうする？」「寒いときどうする？」といった質問に対して「おなかすいてない」「寒くない」などと否定したり、現時点での自分の状態に基づいて答えたりする。 ・自分の経験を言葉で伝えることができるようになる。	①手を左右同時に開閉するなどの制御から、左右別々の制御を1つにまとめる「～シナガラ…スル活動」への挑戦が始まる。例えば右手を開きながら左手を閉じ、次に右手を閉じて左手を開くといった左右交互開閉は、モデルがあれば遅れながら数回交互に開閉できるが、モデルがないと手が閉じ気味になったり、左右の腕を上下させたり、左右同時開閉になったりしてしまう。	マコWS、高瀬川WSで作成中の大人の所作「手本」を見て真似ようとする。例えば大人がハサミをつかって、リメイクシートを切る、マドラーを切るといった動作を、真似ようとしてみる。
		②描画では紙いっぱいに丸をたくさん描く「丸のファンファーレ」と呼ばれる現象が見られたり、丸の中に複数の丸や点、線などを描き、顔らしきものを表現する。	高瀬舟WSで、舟の中に「お花」と言いながら、丸や線をたくさん描く。
～4歳	・数の理解では、対応・呼称・概括（「1、2、3、4」と呼称した結果、全部で「4」あることがわかる）が「10」くらいまで可能に。 ・数の選択（「3個」と言われて、たくさんの中から3個を選ぶなど）や数の復唱では、3まで可能になり「4」に挑戦し始める。 ・「おなかがすいたときどうする？」といった質問を一般化して捉え、それに答えることができ始める。 ・「運転手」「オオカミ」はこういうものという認識を基に、そのイメージを行動で表現できるように。よく知る物語のストーリーに沿ったごっこ遊びが展開される。	③ハサミで形を切り抜くことに調整し始め、左手で紙を動かしながら右手でハサミを操作するという「～シナガラ…スル」ことができ始める。	マコWSにおいて15本のマドラーを数えて選び出すこと、またその15本をハサミを使って真ん中で切り分けることなどに関連する。高瀬舟WSの牛乳パックやリメイクシートを、ハサミで切る所作にも関連する。
～4歳6ヵ月	・数の復唱では、例えば「4739」という4桁の数字を2個1単位が2つあるものとして記憶し、再生する（47を覚えながら39を聞き、39を保持しながら47を再生し、次に39を再生する）ことができ始める。	②道具を使う手と素材を支える手という両手の機能分化が進む（片手に粘土を持ちながら、もう片方の手でヘラや竹ひごを使って粘土に細工をするなど）。	マコWSにおいて、15本のマドラーをハサミを使って真ん中で切り分けることに関連する。高瀬舟WSの牛乳パックやリメイクシートを、ハサミで切る所作にも関連する。
～5歳	・数の理解は、呼称・概括・選択では「10」まで可能になり、4数復唱も確実にできるようになる。 ・その日の出来事、さらに過去の出来事について、接続詞も用いながら複文で話すことができる。	②描線を見ながら鉛筆を動かす方向を制御したり、モデルを見ながら鉛筆を動かすことができる。	マコWSの時の実測体験の動作に関連している。資料・モデル（ヤクルトなど）を見ながら、その形を写し取るべく鉛筆を動かす。
	※河原紀子執筆監修・港区保育を学ぶ会執筆2022『0歳～6歳子どもの発達と保育の本 第2版』学研を元に作成。		

左表は、３～４歳前後を中心に、幼児の発達段階を、「言葉」や「数」に対する認識および「手指の操作」を中心に、研究者等による所見を大雑把に整理・記述したものに、「マコWS」「高瀬舟WS」において観察し得た幼児の様子の中から、関連すると考えられる事象を抽出・提示したものである。

例えば、マコWSにおける「マドラーを15本数えて選び出す」や「15本のマドラーの真ん中に印をつけ、ハサミで切断する」といった作業は、一般的には４～５歳でできるようになることのようであり、３歳には少し難しい動作である可能性が読み取れる。

一方で、「リメイクシートや防音テープの裏紙を剥がす」という作業は、「シールを剥がす」という動作として、2歳半ぐらいから可能になる場合があるようで、3歳児にとっては少し簡単な動作になるようだ。

また、実際のモノ（飲み物容器や考古資料など）を観て、触れて、観察・触察しながら、真弧・マコを使って「モノの形を野帳に描く」という作業については、3歳児にとっては少し難しい内容である可能性が指摘できる。ただ、実際に子どもが作業に集中する様子を観る限り、2歳～5歳ごろに段階的に動作・行為を学ぶ素材としては、有効かつ興味深い事例と考えている。

そしてこれらのいずれの場合においても肝要なのは、子ども達がこれらの動作を学びつつできるようになっていくために、まずはその動作を「模倣」できるような状況を準備・提示することにある。前項2・3で示した、いくつかの「模倣」の様子をみる限り、この点においては、現時点でまずは及第点と言えようか。

5.まとめに替えて～課題と意義と…～

写真⑨

そもそも幼児にとっての「つかむ」という動作そのものが、乳児期以降のとても大切な動作の一つであり、その後の全ての感覚・行動の基礎を作る。WSの最中、机上に置かれたいくつかの考古資料に手を伸ばし、一つを掴みとり、じっくり触っていたかと思うと、次の一つに持ち替えてまたじっくり触り、やがて机上にある全資料を掴んで触るという子どもの様子は、３歳に満たない子ども達にも、しばしば見受けられた（写真⑨）。その様子は、実物資料が子ども達を惹きつける、つまり「ホンモノ」にはその行為を促す力があることを、示しているのではなかろうか。

本稿では、これまでにNPO法人ちゃいれじが実践した WSのうちの2例について、改めて「幼児の発達段階」を考慮したものとすべく、その実施状況を振り返りつつ、見直してみた。ちゃいれじのWSは、常に子どもとスタッフが「1対1」で対峙する対話型実践を重視している。相対するスタッフ（あるいは周囲の大人）の行動を、参加者である子ども（乳幼児）が「模倣」できるように配慮することと、加えて、写真④で確認できたような、本人の達成感など「自己肯定感の醸成」に常に配慮することで、乳幼児を対象としても、WSを実践することは充分に可能であり、かつそれがWSの意義の一つと考えている。未だコロナ禍の終息は見通せないものの、子ども達にとって大切な「つかみ、触る」という動作・行動を、再び積極的に促していくためにも、「ホンモノ」の考古資料を使ったWSも可能な限り続けていきたい。

2022/04/23　第68回考古学研究会研究集会ポスターセッション